

---

 ニ ュ ー ス
 

---

## 日本の火山活動概況（2008年9月～10月）

気象庁

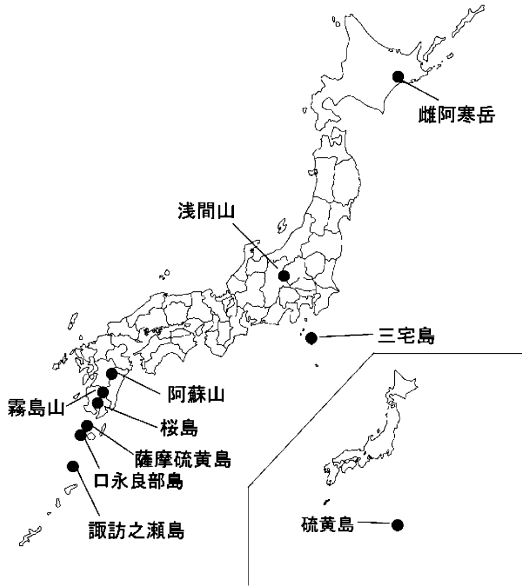


図 1. 2008年9月～10月に目立った活動があった火山

## 雌阿寒岳（43°23'12"N，144°00'32"E）

9月29日に、火口周辺警報を発表し、噴火予報（平常）から火口周辺警報（火口周辺危険）に引き上げた。その後、10月17日に噴火予報（平常）を発表し、火口周辺警報（火口周辺危険）を解除した。

9月26日以降火山性地震が増加した。29日14時11分頃には振幅のやや大きな火山性微動が発生し、直後から火山性地震が多発したことから、火山活動が高まったと判断し、同日14時30分に火口周辺警報（火口周辺危険）を発表した。発生した火山性地震の震源は、概ねボンマチネシリ火口の浅いところ（山頂からの深さ1～3km付近）に分布し、地震の増加前と比べて特に変化は認められなかった。

10月以降、地震活動は概ね低調に推移し、噴煙活動や地殻変動の状況にも特段の変化はなく、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性が低くなったことから、10月17日10時に噴火予報（平常）を発表し火口周辺警報（火口周辺危険）を解除した。

10月14日～16日に実施した現地調査では、ボンマチネ

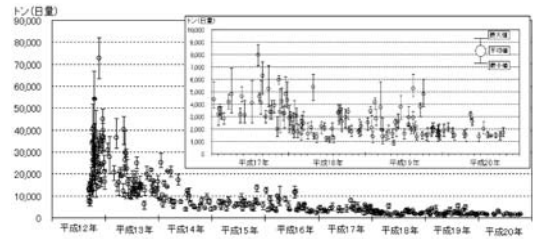


図 2. 三宅島 火山ガス（二酸化硫黄）放出量の変化（2000年8月～2008年10月）

シリ火口内の第4火口で新しい噴気孔が複数点在し、温度上昇や噴気の勢いが若干強まっているのが認められた。

## 浅間山（36°24'23"N，138°31'23"E）

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中4回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり800～2,900トンと依然として多い状態で推移した。

10月2日に利根川水系砂防事務所の協力により行った上空からの観測では、火口底の地表面温度分布等に特段の変化は認められなかった。

山頂火口の噴煙量はやや多い状態が続き、噴煙高度は火口縁上概ね200mで推移した。また、夜間には高感度カメラにより微弱な火映が時々観測されている。

火山性地震は、BL型地震のやや多い状態が続いた。また、火山性微動もやや多い状態で推移した。震源の浅部への移動等の変化はみられなかった。

山体周辺のGPS連続観測では、一部の基線で7月初め頃からわずかに伸びの傾向がみられる。傾斜観測では、火口直下浅部へのマグマ上昇を示す変化は認められない。

## 三宅島（34°05'37"N，139°31'34"E）

島内でCOMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中3回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり1,100～2,100トンと依然と多量の火山ガス放出が続いていた。また、三宅村の火山ガス濃度観測でも山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震（約3～10Hzが卓越する地震）で、高周波地震（約10Hz以上が卓越する地震）も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。9月には振幅の小さな

火山性微動が時々観測された。

山頂火口の噴煙高度は火口縁上 100~300m で推移した。全磁力観測では、火口直下の熱帯磁が鈍化しながらも続いている。

GPS 連続観測では、山体浅部の収縮と深部の膨張が継続している。

#### 硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過している。一方、国土地理院の観測によると、2006年8月以降みられている島全体が隆起する地殻変動が継続している。

#### 阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口の湯だまりの表面温度や湯量には大きな変化はない。

孤立型微動の回数は一日あたり概ね 100 回程度で推移した。火山性連続微動の振幅は小さな状態が続いている。

COMPUSS を用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中 8 回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり 200~800 トンと少ない状態が続いている。

#### 霧島山 (新燃岳) (31°54'34"N, 131°53'11"E (新燃岳))

10月29日に噴火予報(警報解除)を発表し、噴火警戒レベルを 2 (火口周辺規制) から 1 (平常) に引き下げた。

8月22日以降、噴火の発生はなく火山性地震や火山性微動も少なくなり、噴煙量も次第に減少した。火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められなくなったため、10月29日に噴火予報(警報解除)を発表し、噴火警戒レベルを 2 (火口周辺規制) から 1 (平常) に引き下げた。

#### 桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、9月7日に噴火が 1 回発生したほか、ごく小規模な噴火が時々発生した。爆発的噴火および火砕流の発生はなかった。

南岳山頂火口では、10月3日に噴火が 1 回発生したほか、ごく小規模な噴火が時々発生した。

COMPUSS を用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中 2 回実施)では一日あたり 500~1,800 トン前後とやや多い状態で経過した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過している。

国土地理院の GPS 連続観測では、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。傾斜観測では、山頂方向が上昇していると考えられるわずかな変化が継続していたが、10月に入りわず

かながら火口方向が下降する変動が認められた。

#### 薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発な状態が続いており、噴煙高度は火口縁上概ね 300m で推移した。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くが B 型地震で、A 型地震も時々発生した。火山性微動は観測されなかった。

#### 口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

9月4日に、火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 1 (平常) から 2 (火口周辺規制) に引き上げた。その後、10月27日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 2 (火口周辺規制) から 3 (入山規制) に引き上げた。

9月2日以降振幅のやや大きな火山性地震が増加したことから、9月4日10時に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 1 (平常) から 2 (火口周辺規制) に引き上げた。震源は主に新岳火口直下のごく浅い領域に分布した。

10月1日に九州地方整備局の協力を得て京都大学と合同で行った上空からの観測では、新岳火口内南側火口壁で噴気の増加が確認され、遠望カメラ(新岳火口の北西約 3km)の観測でも、新岳から火口縁上 20~200m の噴気が時々観測された。

その後、10月25日に第十管区海上保安本部の協力により実施した上空からの観測では、新岳火口内南側火口壁からの噴気は 10月1日に比べて増加し、噴出口付近には広範囲に付着した硫黄昇華物が確認された。

9月以降、GPS による地殻変動観測で新岳火口浅部の膨張を示す変化が認められ、また、噴気や火山ガスの放出量も増加するなど火山活動はさらに高まっていることから、10月27日11時に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 2 (火口周辺規制) から 3 (入山規制) に引き上げた。

#### 諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

爆発的噴火が時々発生したほか、小規模な噴火も発生した。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、集落(御岳の南南西約 4km)で降灰が時々確認された。10月21日に鹿児島県の協力を得て行なった上空からの観測では、山体に新たな熱異常領域は認められなかった。

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL [http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.htm](http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm)  
 (文責：気象庁地震火山部火山課 飯野英樹)

E-mail : [etakahas@geo.titech.ac.jp](mailto:etakahas@geo.titech.ac.jp)  
 Tel : 03-5734-2338  
 下記 HP にも掲載してあります。

<http://www.geo.titech.ac.jp/koubo/koubo2008/koubo2008.html>

○教員公募

【東京工業大学大学院理工学研究科 地球惑星科学専攻】

1. 募集人員 地球惑星科学専攻教授あるいは准教授 1名  
 専門分野：地球惑星内部物理学
  - ① 地球・惑星の内部構造、内部ダイナミクス、内部物性について教育研究を行う人
  - ② 自分の専門分野だけでなく本専攻の他分野にも広く関心があり、他研究室との共同研究に積極的に取り組む人
  - ③ 大学院・学部の教育研究を通して次世代研究者育成に意欲的に取り組む人
2. 応募資格：博士の学位を有する者
3. 着任時期：採用決定後、できるだけ早い時期を希望します。

4. 提出書類

- (1) 履歴書（市販のもので可）  
 1 ページ目右上に、「教授応募」、「准教授応募」のいずれかを朱書すること。
  - (2) これまでの研究・教育の実績（2,000 字程度）
  - (3) 今後の研究・教育の計画・抱負（2,000 字程度）
  - (4) 研究業績リスト
    - A. 査読付き原著論文
    - B. プロシーディングス、総説など
    - C. 著書、その他特記すべき出版物
- (注) A, B, C いずれも和文のものは和文で表記すること。
- (5) 主な原著論文の別刷（コピー可） 5 編以内
  - (6) 応募者について参考意見をうかがえる方（2名）の氏名および連絡先（所属、住所、E-mail）

\* 応募書類は返却いたしません。こちらで責任を持って処分させていただきます。

5. 応募締め切り：2008 年 12 月 19 日（金）必着 宅配便にて送付してください。
6. 本専攻教員等については下記ホームページをご覧ください。

<http://www.geo.titech.ac.jp>

7. 提出書類の送付先

〒152-8551 東京都目黒区大岡山 2-12-1 I2-20  
 東京工業大学 大学院理工学研究科 地球惑星科学専攻 209 号室 専攻秘書室気付  
 tel : 03-5734-2339

8. 問い合わせ先 高橋栄一：

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 10 月 23 日送信しました)

○教員の公募について

【北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター】

1. 職種・人員：准教授・1名
2. 専門分野：地震予知を目指し、海域における地震活動や地震発生場に関するテーマを中心に、広い視野に立った新しい地球物理学的基础研究を実施する。全国の関係諸機関と協力し、北海道大学が分担する海域での観測研究および大地震時の観測を主体的に推進できること。理学院自然史科学専攻および理学部地球科学科の教育を担当する。

3. 着任予定時期：2009 年 4 月 1 日以降のできるだけ早い時期

4. 学位：博士またはそれに相当する学位を有すること

5. 応募書類：

- (1) 履歴書（国内外の学会活動、受賞歴、プロジェクト研究参加歴、各種研究費の受領歴、学位審査履歴（主査、副査のほか実質的指導を含む）、非常勤講師の経歴、社会貢献などを含む）
- (2) これまでの研究経過（A4 用紙 2 枚程度）
- (3) 研究業績目録（以下のように区分して記載）
  - A. 査読のある論文および総説
  - B. 査読のない論文および総説
  - C. 著書
  - D. 解説、報告書などその他の出版物で特に参考になるもの

- (4) 主な論文の別刷または著書 5 編（複写可）

- (5) 今後の研究計画と教育の抱負（A4 用紙 2 枚程度）

6. 応募の締め切り：2008 年 12 月 12 日（金曜）  
 封筒の表に「准教授応募書類」と朱書し、書留にて郵送すること

7. 書類の送付先および問合せ先：

〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目  
 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター  
 村上 亮 TEL : 011-706-4484  
 Email : [mccopy\\_mm@mail.sci.hokudai.ac.jp](mailto:mccopy_mm@mail.sci.hokudai.ac.jp)

8. 参考：当センターの概要、メンバー等は、下記ホーム